
隠人（おに）使い< 6 >

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

隠人^{おに}使い<6>

【Nコード】

N5308N

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

綾とナイト・メアとの決着。そこに現れたのは……

「隠人使い」第6話（完）です。

六（完）

瞬間。

校内に貼られた式神が、カラスへと変わった。

そして、一斉に綾と望がいる2年B組へ、次々と入っていった。

「何？」

ガー　ウアー

何十羽ものカラスが一斉に綾を取り囲む。

「どうしたらいいの！」

龍王の剣を持ってはいるものの、その式神は綾がこの学校全体に放ったもの。

ナイト・メアをここに閉じ込めるために。

「式神を斬ったら綾が貼った結界が崩れる……」

『俺を襲ってくる奴がナイト・メアと契約したものだ。』

望の脳裏を綾の言葉が掠める……

遙は茫然とした。

（まさか……）

チームメイトや先輩マネージャーがグラウンドに倒れている飯田の元へと走っていく。

一人、ベンチで立ったまま遙は、

（飯田先輩、ナイト・メアに本当にとり憑かれていたの！？土御門君に知らせなきゃ！）

そんな思いと同時に、

『井上は飯田先輩を守れ。』

という綾の台詞が彼女の中で交錯する。

「どうしたらいいの？」

そう呟いた時、

るるる　るるる

携帯の着信音が鳴った。

「もしもし！」

『井上か！？』

声の主は望だった。『そっち、どうなってる？』

「うん！」

遥は頷き、「今、飯田先輩が突然倒れたの！」

『本当！？』

望の驚いた声が返ってくる。『こっちは式神が綾を取り巻いてるんだ。式神は綾がこの学校へナイト・メアを封じ込めるために放ったものだから、斬っていいのか、それともどうしたらいいのか判らないんだ。それで、式神が動いた原因があるかと思ってそっちにTEL入れたんだ。』

「じゃ、やっぱり飯田先輩はナイト・メアにとり憑かれていたの！？』

グラウンドの人混みを眺めつつ、遥が答える。「私、どうしたらいい？」

『綾は飯田先輩を守って言ってたよね。』

「そうだけど」

遥は厳しい口調で、「やっぱり土御門君が心配！私、今からそっちに行く。」

土御門君の事だから飯田先輩の事はもう大丈夫だと思う。今は土御門君の方が心配だから！」

『井上！』

望の言葉を最後に、遥は携帯を切り2年B組の教室へと向かった。

綾は小学3年生の綾を連れて、暗闇の中を走っていた。清明神社の裏山の中、陽はもう沈んでいる。

「ここから抜け出さなきゃ駄目だな。」

高校2年生の綾が呟く。「望が俺たちに気付いてくれれば・・・」

綾は立ち止り、制服の胸ポケットからハンカチを取り出した。右手の親指を少し歯で噛み僅かに出た血で五芒星を描く。

「何してるの。」

小学3年生の綾が尋ねる。

「この悪夢から出る方法だ。」

裏山はいくら登っても頂上がない。方向感覚が失われている。

「兵。」

右手の人差し指と中指を額にかざし、高校2年生の綾は呟いた。すると、山の樹木全体が揺れ始めた。木の葉が次々とカラスとなり彼方へと飛んでいく。

「綾。」

高校2年生の綾は傍らの小学3年生の綾に言った。「闇の力を使い過ぎるな。それはやがて己を闇に置く事となる・・・何が闇か見極める力を持って。」

冷たい口調。小学3年生の綾は黙って、その言葉を受け止めていた。

ガラッ

「藤宮君、土御門君！」

遙は2年B組の後ろの扉を勢いよく開けた。

そこには無数のカラスの姿。

「藤宮君！」

制服のスカートの裾を翻し、彼女は望の元へ走り寄った。

「井上！」

望は彼女の姿を見つめ、「どうしたらいい？」

「斬って！」

遙は迷わずに言った。「土御門君、自分を襲ってくる人を斬れって言ったじゃない。その龍王の剣で！」

「だけど、これは綾の式神だよ。」

望は戸惑っていた。

「土御門君の言う事聞いて！その剣は闇を斬れても人は斬れないでしょう？」

「……そうだね！」

望は頷き、剣を式神めがけて剣を振りかざした。

ザッ

斬った先から式神は紙となって床に落ちて行く。

「やっぱ、綾の言葉は正しかったんだ！」

望は微笑み、次々と式神を斬り続けた。

それが、ナイト・メアの使いだと信じて。

そして、眠る綾の肩に乗る最後のカラスを望が斬ろうとした時、

ザザザッ

何者かによつて窓が全て開け放たれ、数え切れない程の木の葉が室内に舞い込んで来た。

「今度は何だ!？」

「何??？」

望と遙は両手で、その木の葉を伴う疾風を避けた。

一陣。

その風が収まると、

「斬ってはならぬ。」

木の葉の中心から太い男の声がした。

「?.....」

望が恐る恐る目を開くと、そこには1本だけの歯を持つ高下駄を履いた大男の姿。

一目でわかった。

天狗だった。

「起きるがいい、綾。」

望の目の前で、その天狗は綾の肩に乗るカラスを手に移し、そう言った。

「綾.....?」

望が呟く。

すると、綾はゆっくりと身を起こした。

「綾!」

望は喜んで、起きたばかりの彼に抱き付いた。「良かったー!心配したんだぞ。」

「ありがとう。」

綾は口元に微笑を浮かべ、答えた。

そして、視線を遥へと向ける。

「鬼ごっこはもう終わりだ――ナイト・メア。」

「え?」

望は目を丸くした。「どういう事?」

「役 小角えんのかづねの使いか。」

顔を伏せた遥は、ぽつりと言った。

「お前の目的が判ったよ。」

冷やかな声で綾は、「俺を孤立させ元の通りお前の『遊び相手』にしたかったのだから?」

「.....」

そして、床に散らばる五芒星の書かれた紙を拾う。

「そのために、お前はこの学校の生徒全員と契約した訳だ。」

「えっ?」

ナイト・メアも一呼吸置き、「貴方の友達って訳？」
「あああつて、

「そうだ。」

冷やかに綾は答えた。

「この剣でこの空間を斬ると、俺たち夢から覚めるの？」

既に綾の手中にある龍王の剣を眺めながら、望は彼に問いかけた。
「全部、夢って訳？」

「俺にも何処からが夢かは判らない。」

綾は答えた。「だから俺は眠って夢の中から彼女を追いかけたんだ。思った通り、俺の夢の中にそいつがいたのさ。」

冷たい、端正な横顔。

「夢が覚めたら皆忘れちゃうの？」

「忘れる人もいれば、覚えている人もいる。」

綾は剣を持つ柄に手の力を込め、「厄介者さ、ナイト・メアは。今は役 小角の使いとして降臨した天狗に連れられ晴明神社へと向かっているであろう、ナイト・メアの事を考えながら、「お前も帰るんだな。」

と、教室の隅にいる小学3年生の綾に高校2年の綾は声をかけた。
「忘れるなよ、俺の言った事。」

小学3年生の綾は、こっくりと頷いた。

そして。

龍王の剣をかざし、振り下ろす――

「もうじき出来るよ、カレー。」

綾のマンションのキッチンへカレーの煮込み具合を見に行った望が綾の元へ再び帰って来た。「妹の菜穂直伝のマトン・カレー。」

と、そこまで言った時、望はソファで携帯片手に綾が寝ている事に気付いた。

「あれま。」

望はそう言い、ソファの横のタオル・ケットを静かに彼にかけた。「そう言えば、ナイト・メアが来た時からほとんど寝てないって言うていたっけ。」

「……」

彼の気配を察して、綾はうつすらと目を開けた。

「ごめん！起こしちゃった!？」

「いや。」

綾は目を軽くこすりながら、「ちょっととうとうととしてただけ。いつも通りの冷たい微笑で彼が答える。

「カレー、もうじき出来るから。」

「そう。」

望の言葉に綾は頷き、「ちよつと電話する。」
そう言った。

るるるるるる

MD音楽の中、携帯は1度だけ鳴った。

その様子を窓から見ていたカラスは、それを確かめたかのように、
ネオン・ライト人工灯輝く天空へと飛翔した。

そして、式神は綾の元へと降り立った。

「あれ。式神、何処からは入ったんだ？」

綾の肩にとまるカラスの姿を見つめ、望は不思議そうに小首を傾げた。「何かあったの？」

「何でもないさ。」

綾は肩のカラスにそつと触れた。

バツ

青白い小さな炎と共に、式神は五芒星の書かれた1枚の白い紙へ

と変わった。

しかし、そこには五芒星の他に短い文字が書かれていた。望もそれに気付き、

「『また遊びに来るわ。』?」

目を丸くした。「何? ナイト・メア何にもしないで帰っちゃった訳?」

そんな望に綾は微かに微笑を浮かべた。

そして、右手の人差し指と中指を額にかざし、

「印。」

小さな炎と共に紙は燃えた。

「どういう事?」

そう言う望に、

「お前はカレーの心配だけしていればいい。」

「あ! そうだ、ヤバっ! もう出来上がっている頃だよ。」
慌ててキッチンへと戻る。

『貴方の友達って訳?』

ナイト・メアの台詞が綾の頭をよぎる。

「何にせよ。」

綾は軽く背伸びをし、「今回はお前の負けだ。」

そう言うと、ソファに横になりまた眠り始めてしまった。カレーの臭いがする。

何処からか望の声もする。
でも。

今は眠りたかった。

安心出来る所で……

井上 遙も幸せな夢を見ているであろう事を願いつつ。

F
i
n

·
B
·
G
·
M

:

A
·
B
·
S

六(完)(後書き)

夏ばし。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5308n/>

隠人（おに）使い < 6 >

2010年10月8日23時37分発行